

◎「トレイルランがしたい」とおっしゃる。どうもこればかりはオレの範疇ではない。「嵐山から洛西の方」というので地図を調べると、小さい山を越え、市街地や学校のそばを抜け、また小さい山という連続のようだ。行程を作ろうと思うがいい塩梅の道筋が描けない、浮かばない、イメージがはっきりしない。「愛宕では」という提案に、「それでもいいよ」との返答で愛宕に決めた。

◎一人の方が朝に用事があるので、茨木駅に9:30ということになり、嵐山に到着時点で一時間に一本の清滝行バスが出てしまい、清滝まで歩き始めた。平日だというのに嵐山の観光地は人の渦、高校生やら中学生の渦、外国人の渦、かくも多くの人ヒトヒトである、梅田の地下街に匹敵する人の渦である。30分ぐらい進むとやっとまばらになり、何度も歩いたことがある道を進んだ。もうすぐ清滝という手前にトンネルがある、暗いトンネルではライトを灯してやってくる車に、我々の存在を示しひやひやしながら歩いた。思い出すのは上高地の釜トンネル、今でこそ綺麗で立派なものにつけ替えられているが、昔のものは本当に暗闇、壁から天井から水が漏り、その水が凍りつるつる状態、何度もひっくり返った。山から下りてきて、「ああ トンネルを越えたら 車が 待っている」と安心してアイゼンを外し、トンネルの中で慌ててライトにアイゼンピッケルを出したことがあった。

◎今日は、72歳でいまだにマラソンを走っている男性と、少し前に3時間21分で新聞に名前が載ったという女性が二人、というようなメンバーだ。梅雨の季節、降水確率が見るたびに上がったたり下がったりしていたが、なんと昨日の時点で晴れマークが出てきた。「決行」と皆さんにメール連絡、皆さんからは、「了解 ○○を持っていくよ」と快い返事。約束時間の9時半にホームに上がると、すでに皆さんが集合していた。嵐山駅から徒歩1時間で、清滝のトイレのそばに到着、すでに12時前、もうしばらく歩いてから昼飯にしようと歩き出した。

◎20センチほどの小さく黒い蛇に遭遇、ヤマカカシの生まれたてかな。しばらく歩くともう一匹、そして大きいやつが一匹、今日で今年は6匹目に遭遇した計算になる。幼い蛇を見たのは初めて、「そらあ 蛇も 子供時代があるでしょう」とわかっているものの、「子どもの 蛇に感動」による動きは同じだけれど、ぎこちない様子、ミミズのでかいやつぐらいの大きさ、黒光りしたによるよだった。

◎大杉谷ルートに登っている。しばらく登ったところで昼飯を食った。今日は、「下って 麓で ちょっと お神酒を いただきましょう」ということで、ワインを2L、コーヒー用の水を1L、自分の飲み水が1.5L、ガスを一本、なかなかの歩荷訓練である。昼飯は、手造りおにぎりに、野菜炒め、卵焼きを、美味しくいただいた。

◎歩き出した、みなさん軽い足取りでどんどん進む、荷が重いオレはふーふー大汗である。二俣で休憩して下の道をとったのが大失敗、なんだか徐々に荒れだし、倒木を跨ぎ、やせ細ったトラバース、ついに樹々が左右に倒れ上に登って幹の隙間を抜け、急斜面を下り、「道がないよ 消えている これはだめだ」去年の台風以来おおいに崩れ人が入っていないようだ。「仕方がない 分岐まで引き返そう それを登って 月輪寺から帰ろう」ということで引き返した。30分以上のロスタイムかな。

◎フーフー言いながら乗越に上がった。大杉谷の道、今年初めぐらいに何とか通れるようになったと聞いていた。登り口にはロープが張ってある、登り始めて30分ぐらい、軽の四輪駆動車で登れそうな道、そのあともスギの植林が続く、雪の季節には魅力的な道だと思ったが、この季節はあまり楽しいとは言えない道だった。

◎乗越でコーヒータイム、コンロで湯を沸かし、ドリップコーヒーを味わった、美味い。

◎月輪寺でぽとぽと落ちる水を汲んだ。朝の時点で水を汲まなければと思った林道わきの場所が枯れていた、それこそまったく流れていなかった。雨が少なかったのか湧水の量は少ない模様。それでも川の流れたっぷりの水量が流れている。尼さんが戸を閉めていた、初めて歩く姿、話す姿を見かけたが、まだまだお若い。「息子が麓に降りている 荷を取りに行っている」と、朝の林道で、青い作務衣を着込んだバイク青年にであったが、彼かな。

◎4:45 月輪寺の登山口に降りてきた。川が流れ、太い本流に合流していく。この先に、「空也の滝」があるらしい。空也聖人がこことどういう関係か知らないが、京都には歴史上の人物名とあちこちででくわす。

◎出発地点の河原で、コンロに火、ペットボトルに入ったワイン、ソーセージ、パン、トマト・・2時間ほど飲んで食って話した。最終バスもなくなり、またもや徒歩で駅まで、帰ったのは9時ころだった。

沖縄の遊郭の話<辻の花-くるわの女たち>を読んでいたら、「琉球」という言葉が出てきた。また最近の考古学の世界、石器時代・縄文時代の沖縄の遺跡に人骨が出てきてにぎにぎしい。沖縄は、鹿児島以南は行ったことがない、知っているようで何も知らない、なので無関心を装ってきたが急に興味がわきだした。<琉球・沖縄と海上の道>という本を借りてきた。

最近の中国政府が、「あの辺りは、中国の領土だ」というニュースが流れ、「なんというアホーなことを」と思っていたが沖縄の過去の話、歴史を紐解いてみると、当時の中国との関係、薩摩や幕府との関係、さまざまな流れがあるようで、まんざら中国の主張も的外れではないかもしれないと思えてくる。

◎琉球という言葉、隋書に、「流求（溺れ助けを求める）」という意味らしく、当時の隋が沖縄列島のことをこう呼んでいたという、隋の蔑称らしい。中国王朝の冊封国（さくほう：従属国のこと、朝貢とも同じ）。琉球は戦後沖縄県知事が観光誘致の俗称として普及させた。この言葉、ロマンチックでエキゾチックな響きを持っているが、こういう経緯を聞くと少々しらけて興ざめだね。

◎那覇港は、唐に向かう船の交通拠点として格別な存在であった。那覇港から中国福建省に向かう進貢舟の航海ルートが描かれた航路図が残されている。島々の位置や形が描かれ、水深のふかさ、風待ちの場所、寄港、曳航、かがり火のための準備、島のノロ（神女）が航海安全を祈り祈願の言葉を捧げた、などが載っているらしい。

◎島なき大海原を経て福建省に至る荒々しい海の道である。当時の船で十日間ほど要する航海ののち閩江（びんこう）の入り口に位置する五虎門という岩礁に到達する。さらに30Kほど川を遡行して琉球人のための宿泊施設や商取引所がある。渡航人員は船の種類や時代によって異なるが、おおよそ100~200人であった。そのなかの20名ほどが進京使として直線距離で3000Kも離れた北京に赴いた。

◎日本本土を指してヤマトと呼ぶ言い方は、少なくとも500,600年前にはすでに行われていた。山城の訛ったものと解されている。かつて京都に拠点を持つ国家とその土地というイメージが、琉球人の根底にあったと思われる。<この件調べてみた。古事記・日本書紀では、倭・日本をヤマトと表記している。紀元前は中国王朝が倭と表記している。日本と変更するまでは、倭国-わこくと自称し、倭人としていた。>

◎古琉球の地理認識では、偉大な存在である唐（中国）が西に在り、はるか南方には南蛮と呼ぶ東南アジアがあり、北には朝鮮やヤマトが位置していた。琉球にとってヤマトは異国の大国であり、文化的に最も身近な存在だと意識されていた。にもかかわらず、琉球は、中国・朝鮮・東南アジアとの交流をまとめた外交文書はあるが、大和との交流の体系的なものはない。琉球は、中国・朝鮮・東南アジアとの交流は、中国皇帝を頂点とする朝貢体制（冊封体制）を前提とするものであったのに対し、ヤマトとの交流は民間ベースが目立っており、九州や堺のヤマト商人が那覇に来航し、商業活動を展開していた。

◎琉球の歴史を見ると、1609年に薩摩郡が沖縄に侵攻している。以降薩摩藩・鹿児島県の附庸国（従属）であり続けたが、それ以降も以前も中国への朝貢は続けられた。1872年薩摩藩置の翌年、日本政府より琉球藩が設置されたが、琉球王は、「皇国と志那の御恩」に感謝し清への朝貢は続けられた。

◎近代になって、清国を中心とする国際秩序=冊封進貢体制は、19世に入ると、密貿易、海賊、宗主国と属国の利害対立、欧米列強が東アジアを組み込もうとする、というように揺さぶられだした。英仏艦船が琉球来航、修好、貿易、布教の要求をしてきた。これを機に薩摩藩は五代秀堯を琉球に派遣、大規模な外国貿易を推進した。

◎日清両国の琉球国に対する綱引きが始まり、日清戦争終結まで続いた。終戦で琉球の日本帰属が確定した。

◎大東亜共栄圏構想が始まり、英米との武力衝突を辞さない南進が始まり、太平洋戦争の終戦4年前にやっと沖縄に軍事施設が造られた。太平洋戦争の緒戦で破竹の勢いを見せた日本軍が、連合軍の反撃のまえに連敗を続け交代しつつあった。この時点で沖縄は航空基地の戦略的重要ポイントと認識され、軍備化されていった。

◎1944年7月にサイパン玉砕が伝えられた。サイパンには多数の沖縄の人たちが入植していた。1944年10月に沖縄爆撃が始まった。正規の軍人以外に、防衛隊、学徒、青年義勇隊、女子救護班が動員された。防衛隊、学徒隊の半数が戦死した。日本軍は一般住民に、弾薬運搬、炊事、救護、道案内、避難壕提供などを要求した。

◎経ヶ岳という名前、信州にも関西にもある、他にもあるようだが、今回の目的地は福井県の経ヶ岳だ。

◎勝山市の“東山いこいの森”を予約した。毎年何度かお世話になっている。管理の源田さんから賀状をいただいた。帰る時にはお酒もいただいた。上西・堀井・相澤・前川・オレ、5名でやってきた。「4時半に迎えに来てください」とお願いして山に入った。

◎10:45 登山口を出発。天気は良くない、昨夜の予報では夕刻からの降水確率が60%だというが、山間部のここは多に湿っている、霧雨が降っている、地面が濡れている、葉にも草にも水滴がついている。

◎保月山まで50分でやってきた。まだまだ樹林帯だけれど、空はまっ白の霧の中、雲の中、100%の湿度でどんどん濡れる。「上半身は暑いので濡れてもいいか・・・」と雨具のズボンだけは履いた。

◎カッコ～カッコ～とさかんに聞こえる。上西さん、「カッコウは 托卵する」とおっしゃっていた。「おお 托卵 その言葉は知っている」以前に見た画像を思い出した。小鳥の巣にカッコウがやってきて、すでに産み付けられた小鳥の卵を蹴飛ばして棄て、そのあとに自分の卵を産み落として、「バイバイ」ときれいさっぱり行ってしまふ。小鳥君が返ってきて卵が入れ替わっていることに気づかず温め続ける。孵った子どもの世話をする。子鳥はどんどん大きくなり、親よりもっと大きくなるが、小鳥は卵が入れ替わったことには気づかず世話を続ける。最後にはめでたく巣立ちの日を迎える。動物界でも巣立ちのあとの親子交流はあるのだろうか、知りたいね。

◎12:30 釈氏ヶ岳（杓子岳）1448Mにやってきた。名前が二つも書いてある、どちらかにしてほしいね。尾根に登ってきたようで、晴れていればぐるり見渡せるいい所だろうと、まっ白けを見やり想像する。

◎12:50 中岳 1467Mにやってきた。たいらなピーク、土の芝、まわりは笹が茂り、小さな樹が所々に突き出ている、その一つに割れた標識。「おそらくここも 天気が良けりゃ いい景色だろうね」

◎いよいよ急登、トラロープを張ってくれているが、雨に濡れた黄土色の粘土、滑るとやばいね、気を入れて一歩また一歩。なんだかばててきたかな、最近ば、ばてを知らない身体、瞬発力は弱い、持久力は強い、「ジーゼルエンジンだ」と自負しているが、このたとえば、昨今のエンジンの進歩状態を考えれば間違っているかもしれない。多少平らなところでザックの中の甘いものを探し出して口に入れた。甘いもの、栄養ドリンク、ガッツドリンク、これらはい、これからは常備しておかなくてはと反省しきり。

◎この土のつるつるは嫌だねえ、濡れる、滑る、汚れる、いやだねえ。さっきも、つるり、2Mぐらい滑ってしまった、草をつかんでいたので止まった、氷ほどではないけれど、滑るねえ。

◎上が見えない、頂上がどのあたりなんだかわからないが頂上にほとんど近い所ではないのかな、道の両側に笹が生えている、背丈は1Mぐらいかな、草も生えている。翌日に白山高山植物園のおっさんに話を聞くと、鹿はまだ来ていない、そこまで来ているらしいけど、というご返事に納得、昔の山は、ほんの10年前、20年前までは、どこの山でも草が生え、笹が生い茂り、地面は見えなかったよねえ。

◎カエルの鳴き声がする、小さいやつが水溜りに居るのかなと回り込んだ。なんだか野球のグローブのような奴が、水溜りの中で蠢いている、よく見るとガマガエルの塊が蠢いている、交尾のようだ。奴らの腹だけは白い、一匹のメスに五匹ぐらいの雄が、「オレにも させろ」と蠢いている。下りの時には気配もなかった。

◎長そでシャツ一枚では寒い、霧雨が降る、草や笹のしずくで濡れるが雨具の上着では暑い、シャツをもう一枚着込みほうほうのていで下った。粘土の斜面、ロープをつかみ後向きに足を下ろしていった、慎重に一歩一歩。

◎山には花がたくさん咲いていた、紫色の花はなかったが、白い花が何種か、ピンクもあった、みんなコインより小さいぐらいの花たち、いいねえ。

◎3時に釈氏に帰ってきた。これで尾根は終わりかな。「ひとり 山 よかったね」樹林帯の中、湿度100%のなか、「ええ 地衣類 えらく きれい」と再発見。ブナの樹の肌、ケタイな奴が生き生きしている、光っている、もぞもぞ動き出しそうだ。石に着いた白いケタイ君、真っ白じゃないか、君たち、濡れると、きれいねえ。

◎4:30 登山口に降りてきた。雨の日の登山、これは楽しくないね、いやだね、来てしまったから、登ってしまったが。それでもおおいに満足、いい山でした。

◎昨夜は、東山いこいの森の小屋をお借りした、三角屋根の小屋ながら5人や6人は寝られる、テントに比べよほど快適に過ごせる、しかも電気が来ている。相澤・前川お二人の買い出しで鍋をいただき、ビールにワイン、12時近くまで話をしていた。雨の山から下り濡れているので着替えたい、温もりたい、風呂に入りたいと思ったが、着替えを小屋に置いてきたということで風呂はあきらめた。食料の買い出しにスーパーへ、野菜はカットしてある、肉も買ってある、ということで、飲み物類、お菓子やら果物やら、明日の行動食などを買った。真っ暗な時間小屋に着いた。チェックインはしていただいている、「カギは?」「もってないよ」近づくとドアが開いたままになっていた。「締め忘れたのかな」とのんびりとした話、雨が吹き込まなくてよかった。まずはシャワーを浴びた、4分/100円、石鹸もないのでこれで終わり。コンロ・ボンベ・コップ等山は山の道具一式、すぐに豚鍋ができあがり、まずはビールで乾杯、ワインも、ウイスキーも、焼酎も、おいに楽しんだ。翌朝は鳥の鳴き声を聴きに散歩、すべてが同じ音に聞こえるが、上西さんの解説で、「あれがこれが・・・」といくつかの鳥の名前が出た。「オオルリ 声もきれい 姿もきれい」「あれは ツツドリ」すぐに忘れていく。

管理人の源田さんに、恒例の記念撮影をしていただき、土産に日本酒をいただき、いこいの森をあとにした。まずは石川県方面に、北の方に進み、白山高原植物園へ。一人300円、麓に、「トイレはここだけ 中にはありません」と書かれている。自然の山の中に、自然に近い植物の展示、それでもたくさんの花が咲いている。まず目につくのが黄色い花、ニッコウキスゲが斜面一面に乱舞、3年前6月下旬に赤兎の山頂で目にした光景が思い出される。赤兎は標高が高いので、もう少し後らしい。ここらあたりの野山は、草がいっぱい、緑がいっぱいだ。「鹿は福井までは来ているらしいがこのあたりにはいない」と教えてもらった。経ヶ岳でも草がいっぱい、取立も、赤兎も草がいっぱい、関西の芝刈り機を思わせる山の姿ではない、本来の草いっぱい山の姿だ。あらためてパンフレットを見ると、ここは元桑畑、標高800Mぐらいにあり、高山帯・亜高山帯に分布する植物種の絶滅回避と系統保存等を目的としていると書かれている。去年白山に登った折、腕章をつけた人が草むしりをして、「外来種を取り除いています」という話だった。固有種を守ることは大事なことと思う反面、混ざっていくのは自然なこと、人間なんてどんどん雑多になっていく、とも思う。

去年見た平泉寺の苔にはおおいに感動した。雨が降っている今だが、苔の青さが青くない、迫力がない、何か物足りない。去年の印象が強すぎたのか、季節的に今はこうなのかわからないが、期待していた分、多少がっかりしている。雨が降っているので早回り、参道の奥を右に、平泉寺発掘現場を歩いている。1572年に一向一揆の攻撃で全山焼失するまでは大きな寺であったようだ、京都や奈良に負けないぐらいの規模、立派な寺があったようだ。その跡地を、田畑に利用され、だんだん畑風の敷地が麓に下っていく。現地の説明を見ると、発掘前と発掘後の写真には、石垣や石造りの太い水路があちこちに残っていたようで、それを利用して田んぼに、水路に使っていた。それらを掘り起こしていくと、石垣の連続、その間に石畳があり、それぞれの塔頭入り口の門があった跡、建物の跡、そんなものが出てきたようで、まだまだ発掘途中、立派な寺だったようだ。一部、簡易に再現されている塀に門、塀は厚みが1Mを超えるような土塀、石畳はひとだかえもありそうな丸みを帯びた石ころをずっしり並べてある。この石ころの石畳道は歩きにくい、実に素晴らしい、美しい、立派なものだ。パンフレットによると、中世の平泉寺の主要伽藍は48社36堂の建物群、6000坊と呼ばれる僧侶の住居群、これらが白山神社所蔵の絵図に描かれているようで、当時としては大都会を思わせる。

さあ帰途に、昼時も過ぎたのでどこかで食事、このあたりの街中は食事のできるような店が見当たらない、「それじゃ 高速道路に乗って SAで食べましょう」と勝山ICから入った。「次のSAで・・・」「あれれ 重大事故発生 通行止め 下に降りなさい」という告示。なんと8号線を走ったが、レストランに出会わず、道の駅でパンなどかじって、茨木まで帰ってしまった。

◎ぱさーじゅ Passage: 通路、旅、移住を意味するフランス語です、と書かれている。現在は友人がこの文芸小冊子を、主宰しておられ、「仲間に入らないか」とお誘いを受けたが、「小説 文学 ととてもとても」と言いつつ読ませていただいている。「オレにも何か 書けないか」「画文なら いけるかも」なんて思いながらもしり込みしている。「オレは 絵と 山だけにする」と宣言している、この年で間口を広げるのはやめておこうと思っている。五十歳代までは小説が大好きでよく読んでいた。読んではいしたがこれを書いてみよう、創作してみようとは、今も昔も全く思わなかった。三十歳代か四十歳代のころ、同じ年ということもあって、中上健次の“枯木灘”を読みだしたが、途中で何度もほおりだした、結局最後まで読めなかったのはなぜだかわからない。最近、古本屋で“重力の都”を見つけ読み、いたく感動、「これはすごい この性愛の表現は 吉行淳之介よりずっと下品だ」なんて喜んだ次第。48歳で亡くなったのが残念。そうだ、当時、高橋和巳も読んでいました。やはり同じ年で、48歳で亡くなった、少し売れっ子の絵描き有本利夫がいた。二人とも同じ年ながら、若くして売れっ子で、それはそれでいいじゃないか、夭折してもいいじゃないかとは、才能の無い奴のぼやきかな。六十歳代は枕元に、丸山健司を置きちょっとずつ楽しみましたが、小説は読まなくなりました。

◎表紙の絵（松村哲秀）がいたく新鮮に見える。鉛筆かペンで描いた上に淡彩をかけてあるのか、現場を丁寧に描いた風景だ。その絵は表紙の題字と共に、黒の混じった緑色インクで印刷され表されている。絵の風景の中に人がいる、目の前にいたり、遠くにたたずんでいたり、その人たちが風景を身近なものにしている。

◎沙原るり著<ジョージアUSA1972>アメリカ南部の大学に留学した日本人の二十歳代なかばの女性のはなし。哲学の口頭試験の場面。「人はなぜ生きるのか 人が生きる理由は何か」と。予想外の質問だ！しばらく言葉が見つからない。

教授と主人公の言葉が続くが、ちょっと小説を離れ、この質問を考えてみた。二十歳代なかばのオレならば、絶句してしばらく沈黙ののち、夢やら希望やらを語ったかもしれない。では七十歳を過ぎた今は、オレはこの質問にどう答えるかという、「つまらないことを聞くな 十の何百乗の数字 そんな時空がある」「そんな時間の一瞬 そんな空間の隅っこ オレの生なんて 語るすらくだらねえ」なんて言ってみたいものですね。次に、「ぱさーじゅと私」という項で、作者の素晴らしい文章を見つけ、吹き矢のように刺さってきた。<略 大気の律動に乗って天駆けるか 地球の鼓動を聞きながら地面を這うのか 略>

◎橋本みのる著<龍王、そして雷神>平安時代の大鏡を源典に文章が展開されている。古典の文章を読む時に悩むのが、和歌やら漢詩やら俳句やらが読み込めない、わからない、感性が働かない。先生方の解説を読んで、「ああそういうことだったのか」では何とも全てがしっくり伝わってこない。下記のように詠われたものが、しみじみオレの身体に染み込めば、いかに面白かろうと悔やまれる。

宮の滝 むべも名に おひて聞こえけり 落つる白泡 玉と響けば 宇多上皇

このたびは 幣（ぬさ）ととりあえず 手向山 もみじの錦 神のまにまに 菅原朝臣

◎安達一白著<道草-その現象学的記述>現象学とは、身近な生活世界について記述する現象学的運動である。<略>この現象学的把握を漱石の言葉に置き換えると、つぎのようになろう。「科学者のような傍観的態度」ではなく、「自らの身体」で、「実地の生活の波濤にもぐって」「内面的実質・生命原理」を捉え直すことである。

現象学的運動ということが在ったことさえ知らなかった。絵画の制作理論や技術論を熱心に読んだが、半世紀近くたった今、まったく忘れてしまった。身近な生活、自身の想い、そんなものを淡々と記述された文章は面白いと思う。小説はもちろんニュースとは違うが、「5W1H」ではないけれど、いくつかのW、ささやかなHが欲しい。絵では、「説明のための説明はあかん」「化粧のための化粧はいらん」なんて生意気に思う絵描き生活です。

◎ マッチ擦る つかのまの 海に霧深し 身捨つるほどの 祖国はありや

◎「ああ いい文字だ」オレにもこういう文字列を心地よく受け入れる感性があったのかと自嘲気味にほほえむ。これは短歌だけれど、最初の 575 が好きだ、これだけでいい、あとの 77 はくどい、説明が過ぎる、気持ちが入りすぎる、と拙い文学評論が出てくる。オレが二十歳のころ同世代やら少し上の世代に、有名人がたくさんいた、そんな中のひとり、「寺山修司なんて 知らない」と顔を背けてきたが書架の別冊太陽を借りて読んでいる。

◎新宿の街を歩いていた、明るい時間には駅前広場の花壇の淵には、オレと同世代の若者がぎっしり腰かけビニール袋を口に当てていた。シンナーを吸っていた。当時はまだシンナーが禁止じゃなかったのか、ずらり並んでビニール袋を膨らませていた。あんなものどこがいいのか、皆さん押し黙って座っていた。ある夜、街が騒然として警察車両が右往左往、あとで知ったが、新宿騒乱罪事件だった。オレはノンポリだった、ノンポリとはポリシーがないヤツ、誰もが彼もが、ポリシーを持つべき、持たねば、持たないやつは人間失格の時代だった。だれもが、「反対」と叫んでいた。

◎啄木にふれたエッセイ：啄木はつねに被害者として自分を扱っている。そこには自己肯定の情熱だけが暗く息づいている。啄木にとって、いつだって自分だけが問題だったのであり、それはしかも被害者の貌をした自己であったという。固有の人格としてではなく、悲しい玩具のひとつとして妻を扱う啄木は、どこまでもモノローグを生きた男であった。その内世界は円環的に閉じられており、終生、「何者」と出会うことなく、彼らの一団と我とのすれ違いを生きたに過ぎない。

◎自己肯定、自己否定、オレはどうする。人間が生きている、人間はたった十ヶ月で育つのではなく、それこそ 50 年も 60 年もかかるのだ。そんなに長い間の期間を使って、人間は成長していく、オレはやっと人間になれた。夭折した人たちは残念だろうけれど、生きることがわかってくる。そこまでくれば肯定も否定もない、自身の肉体の存在があり、多少の思考、多少の感覚、多少の喜怒哀楽、そしてじわりじわり終焉を待つ。

◎森山大道というカメラマンの写真が満載されている。モノクロの画面は、画質が荒れ、画面が傾き、空間を切り取ったような構図、そういう悪い面相、汚い画面がぐいぐい目に飛び込んでくる。きれいなカラー写真ばかりに捉われている今の自分が馬鹿々々しい、絵と同じように、「汚い 画面を 表現しないと」と神の言葉。

◎ページをめくるうちに、懐かしい名前、懐かしい画面が次々出現。オレはこのころ、「あんなもの～ こんなやつらあ～」とそっぽ向いて歩いていた。「紹介してあげようか 会いに行こうよ」という知人たちを蹴飛ばして、一人で歩いていたが、こういうケタイな奴らと話していれば、喧嘩でもいい、ののしり合いでもいい、そういう場面があったならば、オレも急旋回していたかもしれない。それほどにページのパラパラの中に人の心が、気持ちが、叫びが詰まっている。

◎天井桟敷、劇団四季、彼が係わった芝居が出てくるが見なかった、今も見たくない。

◎だれだ、あくびをしたのは・・・まだすることは一杯あるのだ！<血は立ったまま眠っている>

◎親父さん、俺はここにいますよ。親父さん、俺はいまここにちゃんといる・・・だから誰もどこへも行かないでくれ。誰もどこへも行かないでください。俺はとうとう憎むということができなかつた一人のボクサーです。俺はまだ醒めている。俺はちゃんと数をかぞえることができる。俺はみんなが好きだ。<ああ荒野>

◎とうとう「希望」という、一番重い病気に取り憑かれてしまったんだ。<白夜>

◎競馬ファンは馬券を買わない。財布の底をはたいて自分を買っているのである。

◎「憎いヤツを なぐれるか?」「会長も言っていました 根性だって 三鷹拳の青木が原田さんにK.Oされたあと サンドバッグに原田さんのプロマイドを貼って 毎日それをなぐったと教えてくれました 相手が決まったら 一生懸命 憎みます」憎悪が生産性であることを教えるのは、幻想の革命家、ハングリースポーツか? それとも、生産されるのは、ただ赤い血だけに過ぎないだろうか? <反時代的な即興論文>

◎競馬にボクシング、これも彼は好きだったようだが、俺には馴染みのないジャンル、賭け事とスポーツ、特に球技や格闘技はてんでダメだ、没運動神経のオレ。

◎湖西線の電車内にいる、四人掛けシートにいるのは、山田・みっちゃん・あゆみちゃんの四名。「山が ちょっと ガスってるかな」比良駅に近付いているが、車窓左側、目的の山々の上の方が白い雲に覆われガスなのか雨なのか、空は半分ぐらい青空も出ている、「なんとか 一日 降らないでくれ」と願いながらの車中。

◎8:20 比良駅を出発。予約タクシーが止まっている、いん谷口まで 1500 円だそうだ。バスは 350 円、土日限定で運行している。タクシー、4 人で乗れば元が取れる、1 時間歩かねばならない。何年か前にバスでいん谷口まで乗った、それが最初で最後だけれど、何と金糞峠まで、すい〜っと登れてしまった、1 時間の歩きが無ければなんと楽なことかと思ひ知った。天候は青空半分、雲半分、比良の山並みは上半分、雲で見えない、あれが雲で終われば涼しい山なんだが、雨が降りませんようにと願いつつ歩き出した。

◎山田さんの企画で、「大津ワングル道を 登ろう」である。フ〜フ〜汗をかきながら 1 時間ぐらいで登山口までやってきた。50 歳ぐらいのころに一人で登っている、ロープウェイ駅の手前を渡渉して登った記憶がある。「ここだ」の声でしばし休憩。女性二人はマラソンランナーでありトライアスロンもやっているという。41 歳の若い方はまだまだ現役で、3 時間 21 分という記録を出したのが数年前、もう一人も同じ記録だが十数年前、オレはマラソンや陸上とは縁のない人、劣等感が湧き出てくる。今も河原で走っているが、かつてみなさんと同じようなスピードで走っていたころ、「マラソンに出てみませんか」と二三度誘われたことがある。「山のために運動していますので」とお断りしたが、そんな方々とは 20 年経った今でも河原でお見掛けする。

◎1 時間ぐらいで分岐点があった。なんだか涼しい。昨日ネット情報では、12 度ぐらいと書いてあった、「えらく涼しい」と思ったが、陽の照らない尾根道、風が通り抜け大阪での蒸し暑さが感じられない。一本取り、ザックの中から果物ゼリーのカップを 4 個、「これで少しは軽くなる」と言いつつ舌鼓、「冷たい うまい」山田さんは歩荷のため 4L の水をザックに入れてらしい。

◎かつての記憶で、よじ登りが一個所あったと思っていたが、よじ登りが 30 分ぐらい続いてあった。まだ若く元気盛りだった、少々の急登を難なく登っていたようだ。「下るのは嫌だね」と当時も思ったが、それは今も同じだ。難路と書いてあるが、オレは掴むところがあれば怖くない、ここは木の根っこがたくさんで怖い所はない。

◎11:45 見覚えのある標識が見え釈迦岳にやってきた。いん谷口から 2 時間半でやってきた。先行の 5 人組も飯を食っていた。われわれもここで食事、今日はおにぎりだけ、おかずが無いのはさみしいとつぶやくと、卵焼きと、とんかつを、ひと切れずついただけた。コーヒーを沸かし 4 人分の重い水がまた減った。平日だが人が多い、帰るまでに 10 組ぐらいの人たちと会った。

◎4 人で話しながら歩くと、北比良峠まですぐにやってきた。60L のザックを担いだ方々、同じぐらいの年輩ながら、「歩荷訓練です アルプス縦走しますので・・・」「え 十日間も すごい」もう何日も荷を担いで縦走は無理ですねえ、したくないですねえ。

◎1:50 金糞峠にやってきた。予定では釈迦岳からヤケオを通過して北小松駅へ降りるルートだったが、ここまで来てしまった。これから堂満を回るか、ここで下るか、時間の計算の結果ここを下ることに決めた。せつかなので多少でも湿原の雰囲気をと 10 分ほど水の流れの中を散策した。このあたりは、テントで一泊の常連の方々がおられる場所らしくいつでもテントが張れる平らな場所がいくつかある。

◎アオガレが終わり渡渉の所で一本取っている。山を登るものにとって、ここは多少緊張するところだけれど、慎重に一步一步下りれば簡単に歩ける道だけれど、マラソンさんたちには危なっかしい所でした。下り初めの谷筋は、小さい岩が不安定で滑る場所もあり歩きにくい。アオガレの所も岩を手でつかめば簡単に歩けるが、気を抜くと事故になりかねない、無事通過できて胸をなでおろしている。この道はもう 5 年ぐらいご無沙汰している、大雨が降れば道が変わってしまい、特に下りは慎重を要する道。岩のガレのあたり、樹が大きくなり緑の葉っぱが岩を覆っている、昔はほとんど樹がなかったように思っていたが、これも様子が変わっている。いん谷口までに、湧水がまだ流れていればと注意して歩いていたら、「ここだ」と声が上がりコーヒー用と行動用に水を入れた。どんどん速足で歩いて、6 時 5 分の電車に乗れた。快い疲れなり。

安威川の河原、河川敷を走りながら、山で蛇を見た話を思い出した。20センチぐらいの黒く細いヤツ、大きめのミミズぐらい、により動きは滑らか、「おお 蛇の子供だねえ ヤマカカシかな」などと思いながらしばらく見ていた。図鑑で検索すると、ヤマカカシは黒くない、むしろタカチホヘビかもしれない、シマヘビの黒いヤツもいるらしい、種類はわからない。少し進んだところで、同じようなヤツをもう一匹発見。奴らは兄弟かと思いつつ、また少し進むと今度は大きいヤツがいた、ならば親子かなんて思いながらも、まったく無縁の種類が違うヤツかもわからない。今年になって6匹目を見たことになるかと数えていたが、あとの3匹はこの安威川河原で出会っている。草の中からはみだし、舗装部分にいるところを発見、彼らもびっくりして草の中に隠れてしまう。なんだか逃げないねえ、と見てみるとカエルを銜えていたりする。マムシは逃げないよ、とぐるを巻いてじっとしている、近づくと、鎌首をあげ、尻尾を震わせる、ガラガラヘビと同じだね。講師業をしている時に二十人ぐらいの方々に前にして、「蛇を見たことがありますか」と聞いてみるが、ほとんどの都会人は、「へび見ないねえ」という返事が返ってくる。もう明日にも7月というのに本格的に雨が降ってこない。河川敷が水に浸かり、堤防の上を、草を蹴散らし靴を濡らしながら走ることが毎年何度もあるのだけれど、今年はまだない。

絵の話もしなければと思う、「最近 描いていないのですか」なんて言われてはいけけないので。当ブログに書くことは、山の話と本の話に始終しているが、アトリエの壁はいつも変っている、床に散らばる絵もどンドン絵の具が入っている、ご安心くださいとはいうセリフではない。アトリエに入る度にまず絵を見るように、まず次の一手を考えるように努めている。オレの絵は他の方々のように、じっくり描きこむ絵ではない、常に画架のまえで筆を動かすような絵ではない、筆を動かすのは分単位で終わってしまう、すぐに終わってしまう。まずはそのひと筆を、「どこに どんなふうの どの筆で 何色で・・・」というようなことをあれこれ考える、あれこれ考え、考えがまとまらない時はそれで終わるようにしている。考えが纏まらないままに筆をとって色を入れては、次の一手が大失敗に終わってしまう。絵を見て考える、作戦を練る、これが大事なんですよ。たまたま奥になおしてある絵が出てきて久しぶりの再会、「こんな色を使っていたのか こういう考え方をしていたのか」しみじみ絵を見て、今と違う考え方、描き方、画風、と今さらながら新鮮さが飛び込んでくる。かつての絵に我ながら嫉妬して、ちょっと盗んでみようかということになる。

先日河原で、マラソン好きの番匠さんにお会いして、ランニングのイロハを教えていただいた。彼は今、ヒザを故障し歩くのが5000歩以内と制限されている。これはつらい、かつての自分を思い出す。あの時はまず痛かった。整形外科に二三度行った。膝関節への注射で、水を抜き潤滑剤を入れてもらった後は、温めと電気、それで通うのは・・・とすぐにやめた。オレは運動ということでは全くの音痴、運動はできない、運動の話も嫌い、運動を習ってもついていけない、という何重苦を背負っていると言えはささか大袈裟なれど、それに近いかな。とはいえ、街を歩く、山を登るといことは好きで、いまだに人に負けないぐらいに歩き登っている。若いころ、「走るの かかとを着くんだよ かかとを着けば 長い時間 走れるよ」と教えられた。歩く、走る、登るといことは四十歳ぐらいからやりだした。最近TVの番組で、走る教室の先生、「走るの つま先で」と言っていたけれど、質問すると、「スポーツの技術面 流行りのようなものがあって 昔はかかと 今はつま先 ということもありですね」という。そんなことを聞いて、「つま先走り」を試みるが、なかなかできるものではない。四半世紀もやり慣れた「かかと走り」をそう簡単に「つま先走り」に変えられない。「オレの身体 宙に浮いている？」これは走りながら、「どちらかの足が 常に地面にあるのでは 宙には浮いていないのでは」とボソボソ走りに我ながら業を煮やしている。早くは走れない、どちらかの足が地面に残っているように感じる。「浮いていないと ウォーキング 浮くと ランニング」なんてうまく表現してくれる。オレも内心、「浮け 飛べ 宙だ」と気持ちだけは心がけている、どんなスタイルかな。「走ると 汗がドット出る 運動量がどっと増える」「なるほどねえ」日々、とにかくにも、走ることは気持ちがいい。